

mnividens

【オムニヴィデンス】



切込三彩出土資料

切込焼は江戸時代後期から明治の初めにかけて宮城県加美町切込でつくられていた磁器類です。西山、中山、東山と呼ばれる山裾に5基の窯跡が発見されています。1975年に西山の工房址で東北大学考古学研究室による発掘調査が行われ、多数のロクロ用具、窯道具、磁器、素焼製品、少量の陶器破片が出土しました(下の写真は当時の調査風景)。「切込三彩」と称される、トルコブルー、茄子紺、白、黄の色彩が美しい磁器の破片も発見されました。(撮影:菊地美紀)



(芹沢1978より)

2010.7
NO. 36

新館長・新教授ごあいさつ



東北大学総合学術博物館 館長

柳田 俊雄

PROFILE

(やなぎだ としお)
1949年生まれ
専門：考古学

1998年4月に東北大学総合学術博物館の組織が立ち上がってから、今年4月で12年が過ぎました。歴代の館長に理系出身の先生方が就任されてきたなかで、このたび文系出身の私が館長を引き受けることになりました。私は人類史をテーマとし、考古学の方法をもちいて、人が残した道具類から、歴史を調べていく研究をしています。文系出身ですが、物質資料をとおして研究をすすめる点では理系出身の歴代館長の先生方とその手法にあまり違いはありません。

東北大学は、「研究第一主義」の理念のもと、多くの新発見、発明の歴史をもち、それらの研究の基礎となり成果となった約240万点をこえる資料標本・機器類の莫大な蓄積があります。これらは研究者、一般市民を問わず、それぞれの見方や目的にあわ

せて新たな価値を見いだせる共有の知的財産といえます。総合学術博物館では、こうした貴重な知的財産を集中的に収集・管理し、データベース化をすすめ、研究者・学生に公開し、分野をこえて広く研究・教育の資源として利用できるようにしています。学内には、生物・化石完模式標本、国指定重要文化財、科学技術上の鍵ともなる各種装置・機器類など、量的・質的に欧米の大学にも劣らない内容を誇る学術資源が存在します。

現在、自然史や地理等の部門についての学術資料標本類は、博物館が建設されるまで、理学部自然史標本館と共用して展示しています。歴代の館長やスタッフは、建物がなくても、博物館活動を立ち上げ、総合学術博物館「学術コレクション」(金属、東洋・日本美術史、考古、古生物、鉱物、植物の6分野)の資料標本類データベースを作成し、Webで公開をすすめてきました。さらに、東北大学が所蔵する貴重な学術コレクションを広く紹介する企画展「東北大学総合学術博物館のすべて」シリーズを開催し、年1回の博物館研究紀要(Bulletin of the Tohoku University Museum)、年4回のニュース

レター「Omnividens」の刊行をおこない、研究成果の公開と普及につとめてきました。

2006年4月には、学内の共同利用施設として、総合学術博物館、史料館、植物園が統合され、情報公開や多分野研究支援を担う中核組織として「学術資源研究公開センター」が設立されました。センターは3業務組織をまとめることによって大学の文化遺産を広く社会全般に共有化するための高度な事業として大いに期待されています。

今年4月8日で13年目を迎えた総合学術博物館では、2004年から始まり昨年で10回をかさねた企画展「東北大学総合学術博物館のすべて」シリーズの継続とミニ企画展の開催が予定されています。これとともに公開講演会、公開講座等の実施も計画しています。

総合学術博物館は、地域に開かれた大学の、情報発信ステーション、普及公開のインターフェイス、そして学びの空間として、学内外の人びとが集う憩いの場を提供します。4月から常設展示を一部リニューアルした総合学術博物館をお訪ねください。



東北大学総合学術博物館 教授

西 弘嗣

PROFILE

(にし ひろし)
1958年生まれ
専門：微古生物学

4月より永広教授の後任として、北海道大学より赴任して参りました。私はこれで5つめの大学となりますが、東北大学へは2度目の赴任となります。以前に東北大学で助手をしていたときに、現在の総合学術博物館の前身である理学部自然史標本館の設立にかかわり、展示部門の設計・施工をいたしました。その意味ではまったくの「新任」というわけではないかもしれませんが、その後10年以上が経過し、組織やその役割などは大きく変化したようです。とはいえ、「アウトリーチ」の役割自体は時代を経ても変わっていないように思います。もっとも、昔はこのようなカタカナの表現はありませんでした。

専門分野は、微古生物学、古海洋学、地

質学の分野です。微古生物学とは、顕微鏡で観察しないと鑑定がむずかしい化石(通常1mm以下)を取り扱う分野です。多くの微化石がありますが、私は浮遊性有孔虫というプランクトンの専門家です。この化石の最大の利点は、過去の水温、塩分濃度、栄養塩の量など、多くの環境要因を復元できる点にあり、海洋環境の研究には欠くことができない化石となっています。また、進化速度が速いので、過去1億年くらいまでの地質年代を詳細に決めることもできます。

この化石を使い、過去1億年間の気候と環境の変化をあきらかにし、その原因を探るとともに、生物への影響を調べています。現在、白亜紀の気候に焦点をあてて研究を進めています。白亜紀には両極に氷床はなく、二酸化炭素濃度が現在の2倍から10倍で、4000ppmに達していたと主張する人もいます。また、海水準が現在よりも200mも高く、世界中が水没した時代です。この究極の温暖化世界に恐竜が闊歩し、爬虫類の仲間が海や空を支配していたのです。この

世界の環境を研究することで、地球温暖化が進行している人類の未来に警鐘を鳴らすとともに、その対策を考える手がかりを見つけ出したいと考えています。

また、「深海掘削計画」という1970年代から継続されているプロジェクトにも参画しています。この計画は、水深数千メートルの海底を掘削する能力をもつ船を使用して堆積物のコア試料を採取し、研究をおこなう巨大な国際協力プロジェクトです。日本も「ちきゅう」という約200mの全長をもつ巨大な船を建造し、この計画の強力な推進国となっています。この船を使用し、海溝型の巨大地震や大津波の発生メカニズムをあきらかにする計画や、数キロメートル地下にあるマントル物質を実際に採取し、地球内部の状態の解明する計画など先進的な研究計画が進められています。もちろん、環境の研究にも焦点があてられています。このような方面の研究の紹介も、今後、博物館をつうじておこなっていきますので、ぜひご期待いただきたいと思います。

大学博物館等協議会2010年度大会・ 第5回博物科学会を開催しました

大学博物館等協議会2010年度大会および第5回博物科学会が、6月24日(木)、25日(金)の2日間の日程で、東北大学において開催されました。今回の参加館は25館、参加人数は97名で、当日参加申込の方を含めると100名に達する、これまでで最大規模の大会となりました。



東北大学青葉山キャンパス青葉記念会館をおもな会場として、初日には野家啓一本学理事より祝辞をいただき、続いて文部科学省生涯学習政策局社会教育課企画官・岩佐敬昭氏より、博物館法施行規則の改正についての詳細なご説明をいただきました。また、阿子島香本学大学院文学研究科教授をお招きして、「歴史資源アーカイブ国際高度学芸員養成計画(大学院GP)の目指すもの」と題した特別講演をおこないました。



博物科学会の発表プログラムは、青葉記念会館4階大研修室において2日間にわたっておこなわれました。「地域と社会連携」「情報」「教育」「マネジメント」「学術」「展示」の6部門で発表数は24本をかぞえ、これに1階ロビーでおこなわれたポスターセッションの17本をくわえると、全31本の、これもまた最多の本数になりました。

東北大学総合学術博物館のスタッフ数名も、開催校としての責務をはたしながら、同時にポスターセッションにも参加しました。柳田俊雄館長は、「考古学研究資料と博物館展示方法の融合」、佐々木理は、鹿納晴尚、岩下智洋(ホワイラビット)両氏とともに、「標本データベースから種同定システムへの発展可能性について」、そして小川知幸は、「歴史資料のコンサベーション——漱石文庫の保存と修復について」と題した発表をそれぞれおこないました。



柳田は佐々木・鹿納と組んで、CTスキャンによって旧石器の断面を自在に観察できるシステムをパソコン上で実演して、おおいに注目を浴びました。小川の発表もその目新しさが、多くの博物館関係者の関心を引きつけたようです。これは本誌6~7頁に掲載いたします。

活発な意見交換がおこなわれた初日の館長会議・実務者会議の終了後は、参加者全員で理学部自然史標本館に移動して見学会をおこないました。今春リニューアルしたばかりの2階の常設展示には文字通りの人垣ができ、標本に食い入るようにして大勢が議論するようすは非常に印象的でした。



懇親会の席上では、魯迅の学んだ片平キャンパスの階段教室を訪れて感銘を受けたという岩佐氏のスピーチを皮切りに、全員が旧知の間柄であったかのように打ち解けて、薄暮の空に浮かぶ白くあかるい月影のもとで、いつまでも歓談に興じました。



2日目は総会終了後、19本の発表プログラムが連綿と続くタイトなスケジュールでしたが、質疑応答もさかんにおこなわれ、予定時間をこえても会場を後にする方はほとんどいませんでした。なお、昼休みには青葉記念会館の事務職員の方のご厚意により屋上展望ツアーが急遽組まれ、予想以上の参加がありました。好天に恵まれて、遠く蔵王連峰から牡鹿半島までを一望のもとに眺めることができました。

こうして、盛会のうちに大会の幕をおろすことができたのは、博物館スタッフはじめ、参加者の方々、アルバイト諸兄、そして関係者の多くの方々のご協力のたまものであったことは言うまでもありません。ここに改めてお礼を申し上げ、大学博物館等協議会および博物科学会のますますの発展を祈念いたします。

日本の前期旧石器時代の資料1—大分県早水台遺跡の旧石器—

1964年に東北大学助教授芹沢長介は、大分県早水台遺跡で縄文時代早期や後期旧石器時代の包含層の下位にある安山岩角礫層から、石英粗面岩を中心とした石器群を発見した。発掘をおこなったP地点のトレンチでは245点の石器を検出し、1年後にその研究成果を発表した(芹沢1965)。

芹沢は、この層から発見された石器群(以下、早水台下層石器群)の特徴について、次のように指摘した。①石英粗面岩、石英脈岩を主体とし、その他に角閃石ヒン岩、凝灰質安山岩、メノウ、水晶、チャートが使用されていること、②チョッパー(片刃礫器)、チョッピング・ツール(両刃礫器)、プロト・ハンドアックス(祖型握斧)、プロト・オベド(祖型楕円形石器)、ピック(鶴嘴状石器)、ディスク(円盤形石器)、ポイント(尖頭石器)、彫刻刀などの石器組成で構成されていること、③礫を素材とした石器が全体で60%近くを占めること、④石器の素材を剥離する技術に、プロト・ルヴェロア技法と呼ばれる石核の周縁から調整剥離をおこない、1枚の目的剥片を作出するような技術がみられること、⑤石器製作技術に、交互剥離、両極剥離、タガネによる間接打法が認められることなどをあげた。これにより芹沢は、早水台下層石器群を、当時日本で発見されていた立川ローム期の石器群や、それよりも古いといわれた群馬県権現山遺跡、同不二山遺跡等の石器より年代的に先行するものと考えた。さらに、共同調査した本学理学部助教授中川久夫による、遺跡のある段丘が更新世の最終高海水準期(下末吉期)以降のものとする地質学的見解を受け入れ(中川1965)、この石器群を約10万年前までさかのぼる時期に位置づけた。また、東アジア地域の当該石器群との比較検討をおこない、石英製石器は中国周口店の北京原人の古い伝統的様相を残した前期旧石器時代のものと考えた。

2001年に本学総合学術博物館と大学院文学研究科考古学研究室は37年ぶりに早水台遺跡を再調査し、この石器群にかんしての新たな知見を得た(柳田・小野2007)。2~4cm大のスクレイパー類が多く発見され、早水台下層の石英製石器群は、チョッパー、チョッピング・ツール、プロト・ハンド



第1図. 大型の分厚い剥片を素材とした重量感のある石器。褐色を呈する石英脈岩製のチョッピング・ツールであり、上部に交互からの剥離によって刃をジグザクに作り出している。刃部は外彎する。長さ15.8×幅16.6×厚さ7.1cm。(撮影:菊地美紀)

アックスの大型の石器類を保有しながらも、むしろ小型の石器が主体を占める石器群であることがあきらかとなった。さらに出土層位の検討もすすめられ、安山岩角礫層直

上には約5万年前より古いとされる九重第1軽石(Kj-P1)、その上位に「黒色帯」や約2.6~2.9万年前に降下した始良Tn火山灰(AT)の存在が確認された(新井・町田

2003)。また、安山岩角礫層より下位の層からも石英製石器が検出され、遺跡での本来の石器包含層を解明することができた。したがって、早水台下層の石器群は、下限が更新世の最終高海水準期(下末吉期)以降、上限が約5万年前よりもさらに古く遡るものと推定される。(柳田俊雄)

【引用文献】

新井房夫・町田 洋 2003「新編火山灰アトラス」東京大学出版会

芹沢長介 1965「大分県早水台における前期旧石器の研究」『日本文化研究所研究報告』1 東北大学日本文化研究所 pp.1-119

中川久夫 1965「早水台旧石器包含層の層位学的予察」『日本文化研究所研究報告』1 東北大学日本文化研究所 pp.121-141

柳田俊雄・小野章太郎 2007「大分県早水台遺跡の第6・7次発掘調査の研究報告」『Bulletin of the Tohoku University Museum』No.7 pp.1-114



第2図. 板状の礫を素材としたチョッピング・ツール。刃をジグザクに作り出した薄手の石器である。石材は角閃石ヒン岩とされているが、地元の考古学者は国東半島の沖合にある姫島産の黒曜石に類似するという。現在、これらの石器は自然史標本館の人類史コーナーに展示している。長さ2.85×幅5.15×厚さ1.5cm。(撮影:菊地美紀)

大学博物館のデジタルな標本展示

情報技術の革新的な進歩によって、私たちの情報環境はめまぐるしく変化しています。大学博物館の集会で標本画像データベース構築やインターネット検索サービスの提供が話題になっていたのは、すでにひと昔前であり、それらはもはや日常の道具になっているのです。最近話題の3Dテレビを引き合いに出すまでもなく、ごく近い将来、さまざまな三次元コンテンツが教材として学校教育の現場や博物館の展示、あるいは学術標本として研究現場へ導入され、それもすぐに日常の光景になると予想しています。

私たちは、博物館に保管されている学術資料標本を三次元デジタルコンテンツとして提供することが博物館の将来の重要タスクになると考えて、1998年よりマイクロフォーカスX線CT技術による標本のデジタル化技術の開発、2004年からはデジタル標本「e-Specimen」の開発、2008年から浮遊性有孔虫デジタル標本データベース「e-Foram Stock」の試験公開とデジタル標本の開発を続けてきました。

ここでは、今回の常設展示の一部リニューアルを機に制作したデジタル標本システムによる学術資料の展示を紹介します。

浮遊性有孔虫は、海洋表層にすむ大きさが1mmに満たない動物プランクトンですが、石灰質の骨格をもつことから海洋底に堆積した地層から化石としてふつうに産出

します。そのため、このグループの化石は、地層の年代や過去の海洋環境の推定にさかんに利用されています。展示は、現生8種の殻形態や内部構造を自在に比較観察できるようデザインしました(図1)。

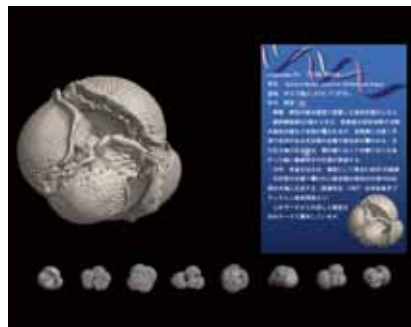


図1

いっぽう、アンモナイトは、6千5百万年前の白亜紀末までに絶滅した頭足類で、オウムガイのように巻いた殻をもっていました。殻の内部は隔壁で細かく区切られており、この隔壁と外壁の交線である縫合線は、

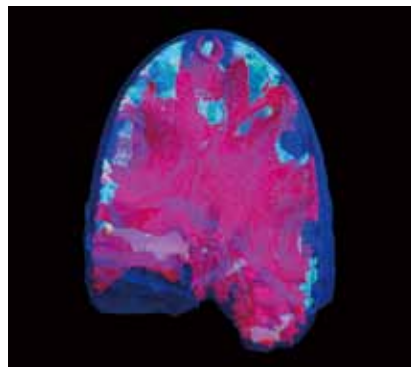


図2

化石の表面にしばしば複雑な模様となつてアンモナイトを特徴づけており、アンモナイト化石が菊石と呼ばれるゆえんとなっています。展示では、X線CT像の特徴をいかし、通常では観察がむずかしい縫合線と隔壁のかたちの関係が容易に観察できるようにしています(図2)。

石器は、打撃や押圧により石を破壊し剥離させることで作られています。そのため、石器に残る剥離面の形態は、石器を作った技術を知るための重要な手がかりとなります。マイクロフォーカスX線CT技術をもちいることで、剥離面の形態を含む石器の形状を精密に計測することができ、デジタル石器により容易に詳細な観察が可能となります。展示では、実際の石器、写真、実測図にくわえて、三次元コンピュータグラフィックスによるデジタル石器を並べることで、それぞれの特徴比較からデジタル石器の有効性を理解できるよう企画しました(図3)。



図3

歴史資料のコンサベーション—漱石文庫の保存と修復について—

はじめに

漱石文庫は、文豪・夏目漱石の旧蔵書のほとんどを収めたもので、洋書が約1,650冊、和漢書が約1,200冊、さらに原稿、ノート、書簡、試験問題などの自筆・身辺資料からなる文庫です。昭和18(1943)年から翌年にかけて東北大学附属図書館に受け入れられました。なかにはイギリス留学時に購入したおよそ500冊の図書や、小さな手帖ですが滞在時の日記もあります。蔵書全体の3割に漱石自身の書き込みがあり、漱石自身がじっさいに手にとって読んだ、あるいは読もうとした本であったといえます。

附属図書館では2005年度から漱石文庫の保存修復事業をおこなっています。私は貴重図書等委員会および古典資料等修復保存小委員会の委員として、現在までこれに取り組んできました。漱石文庫を国民的な文化遺産として、また歴史資料として後世に確実に伝えるためにどのような対策を講じてきたか、その概要をご報告したいと思います。

旧蔵書の損傷

漱石文庫は閲覧希望者も多く、また展示のための貸出も頻繁におこなわれています。しかし2000年に閲覧のために来館した飛ヶ谷美穂子氏のことを借りれば、「もともと造りが安手のうえに愛読を重ねた結果、ついには出版時の状態がわからないほどボロボロになってしまったものもある」



漱石文庫の書架(東北大学附属図書館)

と言われることがあり、たしかに損傷が目立ちはじめていました。

洋書にかんして言えば、その7割を占めているのは当時のポケット版や、いわゆる6ペンス版という廉価版です。そのため経年劣化を起しやすく、保存や補修の面でもいくつかの問題があったようです。

古典資料等修復保存小委員会

そこで2003年に学内に古典資料等修復保存小委員会を立ち上げ、漱石文庫を含めた多数の貴重資料に抜本的な措置をとるべく議論を重ねました。この年の5月と7月に宮城県は二度の地震を経験しています。また2005年8月には宮城県南部地震によって図書館の蔵書が落下しました。地震の被害を受けたからというわけではありませんが、こうした状況から、緊急性の高い問題だという意識が高まったことは事実であろうと思います。

保存修復とは

私は漱石文庫の旧蔵書については予防的保存を含めた文化財としての修復方法をとることが望ましいと提案しました。一般に「保存手当て」と訳されるコンサベーション(Conservation)は、およそ1990年代に入ってから使われるようになった概念で、図書の現状を維持するために最小限の手当てをすることを意味します。とくにアメリカの図書館において酸性紙による大量劣化の問題が発生したため、将来の対策にゆだねることも含めて出てきた考え方です。

ですが漱石文庫にたいしてはもう一歩踏み込まねばなりません。旧蔵書を閲覧するために来館する人たちは漱石の手にした痕跡を探しに来るのです。その3割には漱石自身の書き込みがあり、その意味で漱石文庫は一回きりの歴史的存在という性格を帯びています。したがって漱石がそれを「ボロボロに」したのなら、そのままにすることを選択する。しかしその原因が他にあるのなら、将来的な破損や劣化の状態まで見極めて、構造そのものに介入しても取り除く。たとえば、粗悪な裏貼りや背固めのニカワを除去して新しいものに取り替えれば、本の開きはよくなり、ページの破損、酸化や変色も防ぐことができます。これが保存修復です。



図1: 岡本一平画 漱石先生(東北大学附属図書館蔵)

オリジナルとは

通常、図書の修復とは出版時の状態に復元することを指すのですが、逆に言えば、そういう意味でのオリジナルに戻してはいけないということです。そして、修復するにしても条件があります。処置があとから確認できること、修復前の状態に戻せること、構造を変えることはできるが、基本的な外観の変更はできないこと。ちょうど絵画などの修復を思い浮かべてもらえばよいかと思います。

とはいえ、現在の損傷のどこまでが漱石生前の痕跡、すなわち「オリジナル」で、どこからがそれ以後の劣化ないし破損なのかを判断するのはそれほど容易ではありません。

漱石山房

漱石の旧蔵書は、書斎兼居宅であった漱石山房から直接、東北大学附属図書館に移されました。漱石山房は当時の早稲田南町にあり、朝日新聞社に入社した明治40(1907)年から使われ、蔵書運びだした翌年の昭和20(1945)年に東京大空襲によって焼失しました。

漱石は大正5(1916)年に49歳で死去したので、この間山房は松岡譲(漱石の長女・筆子と結婚した門下生)によって修繕されてはいるものの、蔵書はじつに28年ものあいだ、ここに「放置」されたわけです。芥川龍之介が大正12年に発表した「漱石山房の冬」によれば、山房はすでに悲惨な状態にあったことがわかります。

その後、関東大震災による被災がきっかけとなって、漱石門人の会である九日会に譲渡する話が持ち上がりましたが破談になり、昭和13(1938)年には戦局の悪化にとも

なって空き家になりました。小宮豊隆は「漱石二十三回忌」(1942年)のなかで、「家番を置いて閉め切つてあるために、風通しが悪く、鼠が暴れ、本が傷んでしやうがない」と嘆いています。

漱石文庫成立以後

その小宮が東北大学附属図書館で館長を務めた昭和18年に旧蔵書は急遽、仙台に移されます。こうして漱石文庫が成立し、仙台空襲による被災もまぬがれ、当時片平丁にあった図書館(現・史料館)で、恩師であるラファエル・フォン・ケーベルの文庫の隣に並べられたといいます。しかし戦後の混乱もあったのか、聞き取り調査では、「所狭しの裸電球の下にあり」「利用可能な保存状態ではなかったような感じ」という時期もあったようです。

昭和48(1973)年に現在の図書館本館が開館してからは、漱石文庫はその地下書庫に移され、平成2(1990)年に二号館が開館すると、4階の貴重書庫に移され現在にいたります。

ドキュメンテーション

したがって、漱石が本の収集をはじめから漱石山房に移るまでのおよそ20年、山房での10年、その後の28年、漱石文庫として現在までの60年(二度の引越)と、少なくとも四つの期間、6回以上の保存環境の変化があったといえます。たとえば修復候補の1冊にはネズミの齧った痕がありました。まじめな話、これはいつのネズミかということも議論したのです。漱石山房には黒ネコがいて(「猫の死亡通知」)、岡本一平の描いた漱石の肖像画にも登場します(図1)。愛玩動物であり、ネズミの駆除にも活躍したであろうことは想像にかたくありません(「吾輩は猫である」のなかでは役立たずですが)。

こうして、さまざまな要因を考慮しながら旧蔵書のドキュメンテーション(現状記録と修復方法の提示)をおこない、複数の業者と打ち合わせた結果、洋書の修復で実績のあるアトリエ・スズキに依頼することになりました。以下にじっさいの工程の一部を紹介します。

修復例その1

蔵書のシェイクスピアの伝記(The Leopold Shakespeare. London, 1882)は表紙と本文ブロックの接合がはずれ、本文

ページの紙も切断していました(図2)。背の地小口付近のクロスは一部欠損し(ネズミか?)、虫喰いの痕があり、背貼りは硬化していました(図3)。19世紀後半の木材パルプ紙による普及版なので、そもそも材質があまりよくありません。また、見返し紙には「K. Natsume / December 1893」という自署があり、東京帝国大学文科大学英文科で学んでいた26歳のときに入手した本だと推定されました。

まず、ページ切断の原因と思われるニカワによる背貼りを除去します。本文ページのバが切れた部分には美濃紙で足をおぎない、綴じ直してから寒紗紗によって背を補強し、さらにクータという部品を付加することで本の開閉をスムーズにします。これは本の背幅にあわせて作る紙の筒で、これがソバネのような役割をします。本来の構造にはなかったものですが、外観を損ねることはありません。

つぎに背の地小口の修復にはアクリル絵の具で染色した和紙をもちいてふさぎ、芯紙も取り替えました。しかし欠損部の痕跡は完全には消さずに残しました(図4)。漱石生前についたものという疑いがあったためです。

修復例その2

もう1冊はスコットランド国境の吟遊詩人についての研究書(The Minstrelsy of the Scottish Border, Edinburgh, 1887)で、標題紙に「夏目」の蔵書印が捺してあることから、山房に転居した後ではないかと推測しました。背革がセロファンテープで補修されていて、粘着剤が剥離して硬化したために、革の劣化に拍車をかけていました。天小口付近の欠損は、指をかけて本を引き出したことがきっかけでしょう(図5)。

いずれにせよ、素材の劣化が顕著なため、同じく背貼りとニカワの除去、ジョイント部の補強をして、クータを付加したあと、新しい背革を取り付けました。もとの背革は生きていた部分だけを「象眼」の要領ではめ込みました(図6)。

おわりに

こうして漱石の痕跡を極力残しながら、同時に経年劣化などの原因を取り除き、それ以上の破損を防ぐ対策をほどこしました。2010年6月段階で修復を終えた旧蔵書はわずか18点26冊です。とはいえ大量に捌けば、その修復方法が正しかったのかどうかと

いう検証も困難になるでしょう。時間をかけて取り組むほかにありません。

全国の大学博物館ではアーカイブズを併設していたり、標本整理の過程で歴史資料を扱わねばならなかったりすることもあって少なくないと思います。本報告が何かの調査研究の一助となれば望外の喜びです。末尾ながら関係者各位に感謝いたします。

(小川知幸)

(第5回博物館学会における発表に加筆・修正)



図2: The Leopold Shakespeare



図3: 地小口の欠損



図4: 痕跡を完全には消さない



図5: The Minstrelsy of the Scottish Border



図6: 背革を象眼の要領ではめ込む

東 北 大 学 総 合 学 術 博 物 館
I n f o r m a t i o n



「東北は化石のたからばこ」展を開催中です

「東北は化石のたからばこ」展が、東北電力グリーンプラザ(仙台市青葉区一番町3-7-1)の「東北文化情報コーナー」において、6月29日(火)から8月29日(日)まで開催中です。総合学術博物館が高泉幸浩・加藤大和・千葉友樹各氏のご協力

をえつつ、企画・標本選定・標本貸出等に協力しました。

本展では、茂庭層(約1500万年前)の貝やウニ、白沢層(約600万年前)の植物や昆虫、竜の口層(約500万年前)の貝・クジラ・ゾウなどの仙台市周辺の新第

三紀の化石や、アンモナイト化石の宝庫である北上山地の古生代～中生代アンモナイトやウタツギョリュウ、奇妙なサメ・ヘリコプリオンの渦巻き状の菌、その他東北地方のサンゴ・カニ・デスマスチルスなど、郷土の化石を多数紹介しています。



理学部自然史標本館

●ご利用案内

総合学術博物館の建物については現在建設計画中です。理学部自然史標本館を共用しています。下記は理学部自然史標本館のご利用案内です。

●入館料

大人150円/小・中学生80円
(団体は大人120円、小・中学生60円)
幼児・乳児は無料、団体は20名以上です。

●開館時間

午前10時から午後4時まで

●休館日

毎週月曜日*1、
お盆時期の数日*2、年末年始*2、
電気設備の点検日(年1回、例年夏季の土曜日か日曜日)*2
*1 月曜日が祝日の場合は開館、祝日明けの日が休館となります。
*2 日にちが確定次第ホームページでお知らせします。



総合学術博物館の
ホームページもご覧ください



東北大学総合学術博物館のホームページ
<http://www.museum.tohoku.ac.jp/>

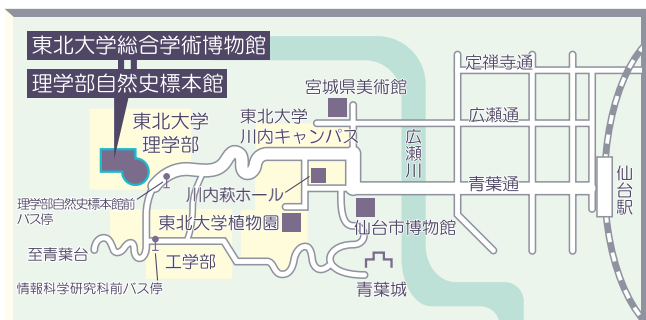
東 北 大 学
総 合 学 術 博 物 館
THE TOHOKU UNIVERSITY MUSEUM

〒980-8578
宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉6-3
tel/fax. 022-795-6767
©The Tohoku University Museum



【オムニヴィデンス】

Omnividensはラテン語で、英語のall-seeingに相当し、「普く万物を観察する、見通す」の意味をもっています。



●交通手段

仙台駅西口バスプール
9番乗り場
所要時間約15分
料金220円

■青葉通・理・工学部・仙台城跡南
経由動物公園循環(系統719)
理学部自然史標本館前下車
徒歩1分

■青葉台または宮教大または
成田山行き(系統710, 713, 715)
情報科学研究科前下車徒歩4分

■仙台市観光シティーバス
「るーぶる仙台」も利用できます